

## 「臨場感」とは何か？

—現場で感じる「臨場感」とジャーナリズムの対応—

社団法人 日本ペンクラブ会員 近藤 節夫

### 一、はじめに

「臨場感」とは一体何だろうか？ 幅広くしばしば使われる言葉ではあるが、残念ながら「臨場感」の意味を実感として知っている人は意外に少ない。「臨場感」という言葉自体が現場でしか実感できない言葉であるだけに、現場体験のない人たちには想像するしかない言葉なのである。ところが、「臨場感」という言葉が、極めて強い説得力を持つ言葉であるために、「臨場感」が必要とされないような場面で、「臨場感」を知らない人たちによって、この言葉が誤解されて使用されているシーンをしばしば目にする。

「臨場感」とは、現場で見たり聞いたり、触れたり体験して、やっと身体で掴み取る体感的「感覚」であり、同時に創造的「知恵」であり、知的「判断力」でもあるのである。現場に足を踏み込まない人が容易く身につけられるような感覚でもないし、ましてや知ったかぶりが簡単にしゃべれるような言葉ではない。現場に身を置き、全神経を集中させた体験だけが産み出すことのできる、センスであり、洞察力なのである。

ここにわたしは、自分自身の旅行上、あるいは仕事上の現場体験を通して掴み取った「臨場感」について、わたしの考えを述べたい。敢えてわたしが持論を主張するのは、「臨場感」なる言葉を実感として知らずに無闇に使っている人が案外多いということと、これまであらゆる現場で感じ取ったわたし自身の「臨場感」が、今日の世相や、テロ社会における危機の予感、言い換えれば危機管理にもつながるリーダーの役目を果たしてくれた、との自負があるからである。

### 二、体験を通して肌身で知った「臨場感」

一九六六年末わたしは、ひとりで初めて海外へ旅した。いまでこそさして珍しくもないが、当時としては周囲の反対を強引に押し切ってチャレンジした、破天荒な武者修行だった。宿も乗り物もすべて現地、それも動乱の地へ行ってから、手探りの中でアレンジする、手作りの手荒いひとり旅だった。それまでのわたしは、他人のアドバイスを、情報を聞いて、素直に信じる「世間知らずの坊や」と言ってもよかったかも知れない。旅先で知りあった土地の人々から温かいもてなしを受け、単純に感激し、素朴な人々の善意を全身で受

け止めた。

だが、わたしの「他人を疑うことなく、ただ善意を信ずる」行動は、あまりにも世間知らずで、書生っぽ過ぎた。スカルノ政権末期の混乱するジャカルタ市中（インドネシア）で、昼日中公衆の面前で突然背後から若者に襲われ馬乗りになられて、あつという間に腕時計をひったくられてしまった。いまにして思えば、人の善意を信じて行動するわたしの姿は、貧しい現地の人々の眼から見たらスキだらけに映ったに違いない。わたしにとってはお考えでも見なかった驚天動地の出来事であった。その数日後にはベトナム戦争中のタン・ソン・ニユット（サイゴン、現ホーチミン）空港で、銃を持った米黒人兵から厳しい口調でどつかれる屈辱を味わい、サイゴン市内では米軍歩哨からライフル銃を突きつけられるような危なっかしい体験もした。

その翌年にもまた、新たな試練を味わった。第三次中東戦争直後で戒厳令下のアンマン市内（ヨルダン）で、武装したヨルダン軍兵士に包囲され、一時身柄を拘束された。空爆により罹災したスエズ運河でも、スエズ市滞在許可書（入国ビザとは別）を持っていなかったために警察に連行され、暗い一室に軟禁されもした。まだ「臨場感」の何たるかも知らなかったわたしにとって、現場に流れる微妙な危機的ムードを「臨場感」として身につけたのは、その後暫く経ってからだだった。

これらの臨場体験を通して若かったわたしが覚ったことは、「善意とヒューマニズムは万能ではない」「貧困と戦乱の地では、常識は通用しない」「土地特有の常識は、その土地でなければ通用しない」ということだった。「臨場感」の極意をわたしは、自分自身の身を挺したひとり旅によって少しずつ学んでいった。

わたしが、その後国内のみならず、世界中のどこの都市へ出かけても自然に身のガードを固め、周囲の環境や、雰囲気により歩き方にも工夫を凝らし、身を護る防衛本能が働くようになったり、行動に自己責任を感じるようになったのは、このときの身の危険を感じた試練が教訓となって生きているからである。そうは言ってもその後も予想だにしないような不測の事態が、身に降りかかってきたこともあった。わたしは、自らの身をプロテクトするために自分なりのガード基準を一層格上げせざるを得なくなった。

自分の身はとりあえず自分で守る、という自らに課せられた責務を、比較的治安のよい国に住む日本人は、とかく他人任せにしがちである。この共同社会における大人の最低限のルールをはつきりと自覚させてくれたのも、わたしが初めて外国で味わった屈辱のおかげなのである。

「いかなる有効な教えも自ら求めずして得ることはできない」旅の現場には、それまでわたしたちが考えてもいなかった不条理な教訓がごろごろがついている。

### 三、「臨場感」の大切さと洞察力

わたしは、自分自身の個人的、また社会的体験を通して知らず知らずのうちに、「臨場感」的感覚を身につけていった。幸い「臨場感」は仕事面でも大きくプラスに寄与してくれた。特に、営業分野では現場を知る「臨場感」が分らなければ、顧客に対して説得力に欠けることを強く意識させられた。はつきり言って、臨場感が分らなければ「仕事にならない」との確信まで抱くようになった。

その「臨場感」の大切さや効果を改めて見直したのは、二〇〇一年九月に勃発した、あの生々しいニューヨークの「九・一一テロ事件」だった。

わたしは、あの悲惨なテロ事件をもちろん予測していたわけではない。しかし、あのころ世界のどこかで、イスラム過激派によるアメリカに対するテロ事件が発生するのではないかとということに密かに危惧していた。その根拠としては、世界最強国家・アメリカの世界戦略に反対するテロ事件、特にイスラム社会の仕組みがアメリカの利己的経済支配により冒涇され、抹殺されようとしていると思ひ込んだ、一部のイスラム過激派によるテロが世界中で頻発していたからである。ナイロビ(ケニヤ)市内のアメリカ大使館爆破事件、アデンにおけるイージス艦自爆事件、そしてタリバーンの首領であるビン・ラディンのアフガニスタン山岳地帯における活発な動き等、を時系列的に並べれば、次に何か起きるのではないか、ということはある程度予測できた。

それに加えてわたし自身、事件の一年半前(二〇〇〇年三月)に友人とともに、パキスタン兵に護衛されパキスタン側からタリバーンの巢窟に近い、パキスタンとアフガニスタンの国境カイバル峠を訪れ、曰く言い難い、この周辺地域独特の空気を物珍しく感じた。それは、人と家畜、物が混在して埃っぽく、所によつては喧騒と熱気が醸し出す摩訶不思議な雰囲気だと言ってもよいだろうか。この岩肌剥き出しの異様な辺境の地は、集落もまばらではあるが、物資の輸送交易ルートとしてアレクサンドロス大王以来、アジア大陸では最も重要度の高いゴールデンルートのひとつである。そのパキスタン側のペシヤワールから国境方面へ近づくと、広い道路の両側には、何と銃砲店が軒を並べて建ち並んでいたのである。真昼間から堂々と武器を販売している。しかも驚いたことにはどの店も結構繁盛して多くの商人が出入している。これだけの数の銃砲店が成り立っているのは、商売としてもペイしているからであろう。そして、その裏には、当然この界限で武器が調達され、それがどこかで使用されていることでもある。あれだけ頻繁にジープやトラックが銃砲店に出入する以上、この周辺で隠然たる勢力を持ち、資金的にも潤っているタリバーンにこれらの武器が流れていないはずがない。

これはあくまでわたし自身の勝手な推測であり、仮説でしかない。しかし、目にした事実をいくつもつなぎ合わせていけば、自然に真実味を帯びた仮説が少しずつ現実味を帯びてくる。この表出した事柄を丹念に拾い、積み重ねていく努力の過程こそ、何ごとを為すにも最も大切なことではないかと思う。現場にできるだけ近づいて「臨場感」を知り、真実を炙り出すのだ。それが、闇に隠されがちの真実を白日のもとに曝け出す導火線となり、仮説構築から真実追求への手がかりとなることを強く銘記したい。

#### 四、「臨場感」から遠ざかるジャーナリズム

「九・一一テロ事件」が勃発した当時、アフガニスタン国内で報道活動に携わっていた日本のジャーナリストは皆無と言ってもよかった。あれだけ活発だったタリバーン周辺の流動的な動きを考え併せ、せめて一社ぐらいは特派員を置いてタリバーン周辺の動静を探らせれば、新しい事実や、ヴェールに包まれた情報を手に入れることができたかも知れない。

だが、そこには一昔前に誉められない前例があったのである。かつて湾岸戦争の折に一旦戦火が開くや、イラクに駐在していた日本のマスメディアは挙って国外へ脱出した。そして、その周辺国に滞在しながらイラクから出国して来る外国人メディアに間接取材していた。ジャーナリストとして風上にも置けない、他人のふんどしで相撲を取る取材であった。今度のイラク戦争にしても、小さなマスコミ会社ならともかく、大新聞社が事態が流動的でニュースの大バーゲンセールをしそうな地へ、誰ひとりとして自社特派員を派遣しなかったのは、ジャーナリズムの怠慢か、現場感覚が薄れてしまった経営者のジャーナリスト魂の欠如か、あるいは駐在員の事故が怖い安全第一主義の大企業病の如からしむところであろう。これでは生きたニュースが紙面や、テレビ画面を通して伝えられるはずがない。

今日のジャーナリズムは、「自ら現場で取材せず」に安易にニュースを売買したり、言いわけを語る傾向がことさら強い。ここにいくつかの例を挙げてみよう。

ある大新聞社の場合、テロ事件後二週間ほど経過してから全紙両面見開きで、自社海外特派員の「事件直後」の行動を肩肘張って報道した。事件の報道に何らの存在感も示せなかった彼らの忸怩たる思いを糊塗した言いわけに過ぎないことは見え透いている。アメリカ総局では、事件後に特派員は直ちに現場へ急行し、昼夜を分たずに取材活動に当たったとか、アジア支局では、ニューヨークに直行しようとしたが、直近の航空座席がとれずにヨーロッパ経由でニューヨークの取材に馳せ参じたとか、ニュース性がまったくない、自社特派員のさほど意味があるとも思えない行動を礼賛するお手盛り紙面だった。この自画自賛的報道姿勢には最早呆れ果てて開いた口が塞がらない。彼らのジャーナリスト魂は一体どこへ行ったのだと尋ねてみたい。この空虚な言いわけ紙面には、ジャーナリストとしての魂がまったく感じられない。わたしたちが知りたいのは、「事件後」ではなく、「事件前」の現地（ニューヨークとアフガニスタン）の緊迫した情報であり、それがもたらされれば、あるいはテロ事件を予感させる何らかのヒントや、手がかりを感じ取る人がいたかも知れない。いずれにしても、その全紙面は、「あとの祭り」だったのである。

もうひとつ「臨場感」とは無関係の、テレビ番組のお粗末な報道姿勢を指摘しておきたい。これもあの事件の約一ヶ月後の、ある民間テレビ局の報道番組で放映された。中年の

ニュースキャスターが、ワゴンカーでアフガニスタンとの国境のひとつであるカイバル峠を目指して、パキスタンの首都イスラマバードを意気揚々と出発した。逐一その動静を録画映像で送っていたが、案の定。シャワールを出た直後の検問所で「待った」をかけられ、それ以上西進することを禁じられた。なぜいけないのか、と食ってかかるタレント氏に対して国境警備隊員は、危険だからと努めて冷静に回答した。呆れたことに、タリバンの巢窟に近い、この場の張り詰めた空気、つまり厳しい「臨場感」をこのテレビ番組プロデューサーを始め、番組関係者は誰ひとり分っていないのだ。誰が指図したのか、このニュースキャスター氏は無邪気なもので、「では、これからもうひとつの国境ゲートへ行つて、そちらから臨場感のある現場風景をお送り致します」と、性懲りもなく前向きな言葉？を残して消え去って行つた。この国境周辺に横溢する緊張した空気や、臨場感をまったく感じることもなく、軽率にも正面から「タリバーン潜伏地域」へ切り込もうとした猪突猛進ぶりには、ただ呆れるばかりである。その後、この後日編が放映されたという話は聞いていない。

この種の報道番組を興味本位に面白おかしく取り上げるのは、テレビ局にとつてお手の物なのであるが、まるでワイドショー的感覚なのである。あの緊迫した大事件の空気の中で、現地における「臨場感」の何たるかも知らずに、自分本位に放送しようという非常識と無節操さは、テロ事件被害者の神経を逆撫ですることにもなる。こんなひとりよがり無神経な取材方法では、わたしたちはそのニュースの信憑性や、公平性に疑問を抱かざるを得ない。これでは、社会性をはらんだニュース等について、テレビから知ろうとする気には到底ならないではないか。

かの天下のNHKにしても米軍がアフガニスタンへ侵攻し、タリバーン掃討作戦を開始したときには、自社特派員をアフガン国内には駐在させていなかった。すべてニュースソースは外国通信社や、外国テレビ局、フリージャーナリスト、フリーカメラマンらに莫大な取材費用を支払って買った素材の中から流されていたのだ。バカ高い取材費（生命の危険と引き換えにフリーカメラマンから提供されたビデオ中継は、一説によると一分三千元とも言われた）を支払い外部の報道に頼つてまでも、NHK監修の最新版映像を伝えなければならぬのだろうか？ これでは、やるべきことはやらずに、困れば他人の手を借りる虫のよさと、安易な報道姿勢をひとしきり感じざるを得ないではないか？

さすがに気が引けたのか、米軍のアフガン国内掃討作戦の後にNHKは、外国メディアとともに、北部同盟軍のヘリコプターをチャーターしてひとりの放送記者をアフガンへ入国させた。しかし、派遣された記者はヨーロッパ駐在中の特派員で、イスラム問題の専門家でもなく、一時的に持ち場を離れた片手間の取材にしか過ぎなかった。このやつつけ仕事の取材姿勢にこそ、体裁だけを取り繕う大NHKの本音と体質が垣間見える。

あれもこれも、現場を離れ現場を離れた、自分たちの日頃の不勉強によつてニュースの重要度、頻発性等に目鼻が利かなくなつていたせいなのである。「正確性」「スピード」「公正」「真実」等、正しい報道を使命とするジャーナリズムにとつて、最も大切な原点を忘れ

るようでは、わたしたちはもはやジャーナリズムを信頼することはできない。

「現場で取材する」というジャーナリズムの金言には、現場にこそ「臨場感」、つまり生の映像、真実の声が増っているとの当たり前の思いが込められているのである。ジャーナリズムに携わる関係者には、少なくとも「臨場感」を知ったうえで、「臨場感」溢れる取材活動をして欲しいと願わずにはいられない。

## 五、おわりに

わたしは、個人的な体験の他に、これまでほぼ四〇年間に亘って臨場感の漂う営業業務に関わってきた。いつも営業の場において、「臨場感」の大切さとともに顧客に重要な内容を説明する際には、「臨場感」がもたらす力強い説得力を臨機応変に活用した。

今年二月初め、多くの旅行会社経営者や旅行業界関係者を前に、危機管理に関するセミナーで、実体験上のリスクマネージメントと危機管理について講演する機会があった。その席上、わたしはアメリカ軍のイラク攻撃の可能性をほぼ一〇〇%に近い九五%（五%のマイナスはわたしがイラクを訪れたことがなく、イラクの臨場感が分らなかったからである）と断言した。巷のニュースでは、その時点では国連や、独仏中ロの反対もあり、英米軍のイラク攻撃の可能性は、五分五分以下と見られていた。しかし、わたしはアラブ諸国に流れる独特の臨場感について触れ、イスラムの原理を悪の温床と決めつける、アメリカに対するイスラム社会の反感、黒白をつけたがるアメリカ的正義感、決めたら一切妥協を排除するアメリカ的発想、等のアメリカ式考えと、益々乖離してゆく伝統的イスラム社会の原理原則、そしてイスラム社会における急激な反米感情の高まりについて「臨場感」を込めて説明した。一方でアラブ社会を抹殺しようと考えているアメリカの直情思考、フセイン不信のブッシュ大統領、そして「九・一一テロ事件」発生、等についても言及した。そして、それらを一直線上に並べてみると、アメリカがイラクに対して行動を起こすのは、最早時間の問題だと思われると述べた。この大胆な予測は、わたし自身アラブ・イスラム諸国の現場の空気、アラブの臨場感がある程度実感として知っていたことが大きな根拠である。幸いにして、過去にわたしは度々中東諸国を旅して来た。多少なりともイスラム圏諸国が醸し出す独特な空気や、「臨場感」について理解していたつもりである。旧聞に属するが、特に一九六八年一月、独立直後のアデン（現イエーメン共和国）を訪れたときは、国内では内戦が終結しておらず、長期間の独立闘争で人心はもとより、国と都市も荒廃していた。アデンの人々は、大人も子ども一介のツーリストであるわたしに対して、征服者イギリス人に対する鬱積する反感と怒りをぶちまけた。その時アデンで、圧制者に対する抵抗は辞せず、生命を賭してイスラム社会を守り抜くとの、激しいメッセージを突きつけられたように感じたものである。このような民族的に迸るパッションというものは、現場でしか感じることはできない。わたしには、そのときDNAとして注ぎ込まれた「アラ

ブ・イスラム社会の「パッション」が、今日においてなお、「臨場感」の漂う場で判断を左右する大きなウエイトを占めているように思えてならない。

三月二〇日、案の定アメリカは英米空軍一体となって電撃的にイラク攻撃を仕掛けた。雪の中をシベリア鉄道による大陸横断を終え、時あたかもわたしは帰路ウラジオストック空港内のテレビで、そのショッキングなニュースを知った。「やはりやったか」と若干の感慨を禁じ得なかった。「結論を出すのは少し早過ぎる。アメリカは最後には国際世論に妥協せざるを得ない」とのんびり構えていた友人たちは、わたしの「臨場感」に則した予断には負けた、と兜を脱いだ。

わたしの「臨場感」的データから言えば、戦闘局面においては実戦経験のあるものが圧倒的に強い。スポーツでも実戦経験が理論に優る。日本のサッカー界が近年急速に力をつけてきたのは、外国の強豪チームとの実戦経験が増えたからである。ゲームで戦っている間に、皮膚感覚で相手の戦術、能力、組織力、ゲーム運び等を「臨場感」として嗅ぎ出し、掴み取り、「勝てる理論」と「勝てるチーム」を作り出すのだ。当然のことであるが、ビジネス社会においても、経営、営業、企画等のあらゆる場面で、現場を皮膚感覚で知っているものが優位に立つということは間違いない。わたしたちは、日常「臨場感」の大切さを認識していなかったり、軽視したり、また一時的に気持ちが高まって、しばしば現場感覚を見失うことがあるが、ピリピリした「臨場感」こそわたしたちが決断を下す場合に、最も信頼できる拠りどころとなるのである。その意味でわたしたちは、真実が漂う現場の「臨場感」を常に嗅ぎ取ろうとする意欲を持ち続けなければ、究極の場における判断や決断力は決して身に付かない。また、日常生活においても充実した、メリハリのある生き方を追求することは難しい。

この拙い小論で、わたしはジャーナリズムをひとつの例に挙げたが、それは「臨場感」が最も考慮されるべきフィールドはジャーナリズムだと思っているからである。情報公開が叫ばれてはいるが、所詮普通の一般市民が情報を入手する手段は、ごく限られている。その情報源は、大衆伝達といわれるマスコミの中でも、新聞、テレビ・ラジオ放送等のジャーナリズムから得るものが圧倒的に多い。それだけに、今日のジャーナリズムが公権力におもねず、不条理な圧力にへつらうことなく伝え手として、受け手の一般大衆に哲学を持つて真実と公平性を報道するつもりなら、ジャーナリズムの原点を改めて見つめなおし、「事件の現場に真実がある」ことを再認識して、もっと「臨場感」が溢れている現場の取材に情熱をたぎらせるべきではないだろうか。同時に、ジャーナリズムに関わる人々は、それだけ自らに重大な使命と重い責任を背負わされているということを強く認識すべきである。

近年の世相に、アメリカのイラク攻撃を重ね合わせると、つくづく「臨場感」の大切さが実感として感じられてくる。